

堀田善衛『スフィンクス』はなぜ書かれたか

——アジア・アフリカ作家会議との関連から

竹内 栄美子

はじめに

堀田善衛『スフィンクス』は、一九六三年四月二日から翌六四年四月二十一日まで週刊誌『エコノミスト』に連載され、毎日新聞社より一九六五年五月に単行本として刊行された。一九七三年三月には新装版がやはり毎日新聞社より刊行され、一九七七年八月には高橋治の解説を加えて集英社より文庫化もされた。堀田作品のなかでは、敗戦前後の上海、南京虐殺やシベリア出兵、島原の乱、原爆投下など歴史的な事象を描いた小説とは異なつて、同時代のアルジェリア独立（一九六二年）に関する国際政治の裏側を描いた異色の作品である。

小説は、パリ、カイロ、マドリッド、ボン、ローザンヌなどヨーロッパやエジプトの都市を舞台として、パリ大学に留学後いまはユネスコに勤務している菊池節子と、中近東で武器なども扱う貿易ビジネスにたずさわる中年男性奥田八作のふたりを軸として展開する。奥田は、戦前、参謀本部からカイロのアズハル大学で学ぶよう命じられ、日中戦争時には節子の父菊池中将の部下だった。戦後はカイロに戻り、アラブ通として日本の商社などのエージェントをつとめ、回教徒に改宗した、得体の知れない存在として一目置かれている人物である。いま、

アルジェリアはフランスから独立するために大量の武器を必要としていることを奥田は察知する。一方、節子は、FLN（アルジェリア民族解放戦線）のメンバーと懇意になるが、フランス側はFLNに対抗する秘密軍事組織のOASなどを使つて独立を阻止しようとし、ほかにも「赤い手」やCATENAといったテロ機関が暗躍する。

このようなアルジェリア独立に関わるストーリーの要諦にあるのは、停戦と引き換えにフランスから出された条件、すなわちフランスによるサハラ砂漠での核実験続行の問題である。しかしながらFLNメンバーは核実験に反対して、そのことで節子ら被爆国日本人々と連帯したいと考えている。作中でそれは「斜視（ルーシュ）作戦」と呼ばれていた。実際には一九六二年三月のエヴィアン停戦協定では、核実験は容認されていたが、同年七月のアルジェリア独立後には核実験はアルジェリア側によって拒否されたのであった。作品の背景には、一九六二年に開催されたアジア・アフリカ作家会議（以下AA作家会議）カイロ大会での堀田の体験がある。それを踏まえ、以下、異色の国際スパイ小説『スフィンクス』がなぜ書かれたのかについて、堀田とアジア・アフリカ作家会議との関係から解明したい。

一 継続する植民地主義

『スフィンクス』と『あるヴェトナム人』

開高健は、旧版『堀田善衛全集』（筑摩書房、一九七五年）の解説「エピキュリアンの悲しみ」で『スフィンクス』を「失敗作」と述べている。しかし、初版単行本の帯文はまったく逆で「本書を推す」と評価していた。十年で正反対の評価となったのは開高健自身の側の認識の変化があると思われる。かつて開高健自身がA A作家会議日本協議会に参加していたころには「本書を推す」と推薦していたのだが、ベトナム戦争従軍を経験したのちにはその認識に変化が生じたのであろう。失敗作とする開高健が「氏の特質のかんりの要素がつきからつきへと目白押しに並んでいるのですが、どれか一つが決定的な強力さを持つことがない」と述べているように、たしかに『スフィンクス』は、多くの登場人物のもとでさまざまなテーマが入り乱れてはいる。けれども、本作におけるゆるがせにできない重要なテーマとして、核の問題はもちろんのこと、植民地問題があることに注意したい。

先に見たように『スフィンクス』は、一九六三年四月から一九六四年四月までのほぼ一年間にわたる連載である。ちょうど同じ時期、『文学界』一九六四年三月号に、堀田は『あるヴェトナム人』という作品を発表していた。これは、パリ滞在中の日本人男性があるレストランで偶然出会った旧知のヴェトナム人とのやりとりを描いた短編小説である。男は、二十年以上前、すなわち戦争中に安南からの留学生の世話をしたことがあった。その留学生は貴公子然としていてフランス語を話していた。男はフランス語を理解したから世話役に抜擢されたのだったが、二十年を経て、もと留学生と偶然パリの暗い寂れたレストラ

ンで再会するのである。もと留学生のヴェトナム人は、戦後、やっとの思いでフランスにたどり着いたが「汚い仕事」をさせられているという。それはアルジェリア人をスパイすることであり、プラスチック爆弾を仕掛けるフランス人反動派やOAS（秘密軍事組織）のエージェントをスパイすることであった。アルジェリアがフランスからの独立のために闘っている最中であつたことから、フランス側のスパイとしてアルジェリア人という正面の敵に対して、さらにフランス内部にいる敵に対して、それら両方をスパイするように指示されているのだ。「一番汚い一番危険な仕事」を、行き所のない旧植民地人であるヴェトナムの旧貴族にやらせるのがフランスという国であつた。

これと同じようなエピソードが『スフィンクス』のなかにも描かれている。「ブルースト野郎とあわれなヴェトナム人」の節では、飛行機でヴェニスからチューリヒに向かう奥田が機内でブルーストの小説本を持っているアルジェリア人男性に着目し「こいつもか」という場面がある。それはF L Nに多いアルジェリア人の知識階級のほとんどが「フランス文化に骨の髄までひたっていたから」であつた。彼等は、エジプト人を東方人（ロリアン）と呼んで自分たちは西方（ロクシダン）に属すると考えていた。カイロのアラブ人知識階級と、ロクシダンと自認している彼等はうまくいっていないため、アルジェリアが独立してもエジプトと強固な関係を持てるかどうか疑わしいと奥田は見ている。彼等は、モロッコやチュニジアなどと一緒にマグレブ連合（マグレブという言葉自体が西方を意味した）のようになるのではないかと考えている奥田は、アラブの内部にも微妙な分断があり一枚岩でないことに留意していた。同時に「ブルースト野郎」という言葉のニュアンスには、ロクシダンと自認する彼等に対する奥田の批判的視点がうかがえる。

それと対照的に「あわれなヴェトナム人」は、機内に乗り込んでいた瘦せこけた学生風のヴェトナム人から想起された言葉であり、奥田はフランスの秘密警察や情報機関の手先として雇われていた彼等を、フランス人たちが「いけ図々しくも、あわれな（ポーブル）ヴェトナム人」と呼んでいた」と思い出すのだ。つまり「ブルースト野郎」と「あわれなヴェトナム人」は、アラブやヴェトナムを従えるフランスを頂点とした西欧中心的な文化的政治的帝国主義の構図に対する皮肉を込めた表現である。『スフィックス』全編にわたりこのような視点があることがえることは見逃せない。

もう一カ所、「危ない橋」の節で、事故で大けがをした節子に会ったあと、アウトバーンでハンブルグに向かう奥田は、ブッヘバルトという国際関係アドバイザーから髭をもつと濃く大きくしたほうがよいというアドバイスを受けたことを思い出す。東洋人の顔つきである奥田に対して「下手をすると、あなたはヴェトナム人と間違われる可能性がある」というのだ。それを聞いた奥田は、独立戦争のときにフランス側についたヴェトナム人がフランスにきて「もつとも厭な、危険で汚らしい仕事」を与えられたことを思い出す。フランスの秘密警察の手先に使われ、アルジェリア人の不穏分子を監視する役目を与えられ、OASのメンバーを尾行する役も担っていた。すでに多くのヴェトナム人が犠牲になっていて、しかも彼等はフランスの右翼からも左翼からも、普通の市民からも嫌われていたのである。

ブッヘバルトのアドバイスを受けた奥田は、行き場のないヴェトナム人について考えるが、見てきたように堀田はこのエピソードを短編『あるヴェトナム人』でも描き、繰り返し語っている。また、作品の冒頭近く、節子がパリのカフェで考える場面では「ヨーロッパがアジアやアフリカを植民地としておさえておくことが西欧文明を維持発展

させる所以であり、それは神の栄光と人間の尊厳を保持する所以である」、「植民地支配こそがヒューマニズムであり、経済的にやっていけないのに遅れた植民地がいまさら独立して何になる」、「こういうヒューマニズムに反対する者はコミュニストである」という主張を真顔で述べ立てる西欧知識人を節子は何人も知っていたという。

『スフィックス』におけるこのような叙述は植民地主義が戦後も継続している証左であり、もともと堀田自身の上海における経験から発した問題意識でもあった。国際文化振興会上海資料室にいた堀田は上海で敗戦を迎えたあと、日本人とともに働いていた親日文化人としての中国人が日本からは切り捨てられ、中国からは「漢奸」として冷遇されることに、いたたまれない思いを抱き心からすまないという謝罪の気持ちを表明していた（「反省と希望」などによる）。同時に、天皇や軍部をはじめとする日本の責任者がそのことに知らん顔をして道義も倫理も見られないありさまに憤懣やるかたない思いも抱いていた。日本の上層部への批判と、堀田自身が日本の国策機関に勤務し「漢奸」をつくりだした当事者のひとりとしての責任感と、この上海での経験は堀田の思想の根幹を形成している。上海租界における支配と被支配の関係は植民地支配と相同的なものであった。『スフィックス』に見られる継続する植民地主義への視点は、このような堀田の中国体験による問題意識から発しているものと見られる。この観点は堀田文学の基底をなしていると考えてよいだろう。

二 堀田善衛とA A作家会議

——核の問題とケメステイのことなど

ところで、日本社会文学会二〇二五年度秋季大会が二〇二五年十一

月十五日に東京九段の二松学舎大学で開催されたさい、講演者である山内明美氏の関係する版画グループA3BCの版画作品「花岡を忘れるな」とともに、米国オレゴン州ポートランド在住のアーティストであるロジャー・ピートによるシンコロブウェ鉱山の地図版画が紹介されていた。展示されていたのは、その地図版画ではなくA3BCとロジャー・ピートとのワークショップで作成されたプリントであったが、ロジャー・ピートにはシンコロブウェ鉱山のウランがマンハッタン計画のアメリカ大陸に渡った地図作品がある。

このロジャー・ピートによるシンコロブウェ鉱山の作品があることを知ることができたのは大変有益だった。というのも、堀田善衛は繰り返しこの鉱山で産出されたウランのことを書いているからである。たとえば、堀田のほかにも岡倉古志郎、江口朴郎、中野重治、野間宏が参加した座談会『現代ナショナリズムの思想と文化』（『新日本文学』一九六〇年十一月号）で、堀田は「カタンガという言葉を知いたら広島と長崎の原子爆弾というものはカタンガから出たウラン鉱で製造されたということをパツと思ひ出すように、なつてほしい。」カタンガのウラニウム会社は、ベルギーのユニオン・ミニールという会社がやっていた。これが船一杯ウラン鉱を積んで港から出た。そうしたら第二次大戦が始まって、そのウラン運送船の行きどころがなくなつて、それがニューヨークの港に入った。その鉱石があつたから広島、長崎の原子爆弾二発がやつとできた」と述べている。さらに、新版全集第六巻『スフィンクス』（筑摩書房、一九九三年）著者あとがきの「二ヒリズムと戦う権利」では、コンゴのジャーナリストが堀田を訪ねて来て、広島と長崎に投下された原子爆弾がコンゴから出たウラン鉱によつて製作されたものであつたことを告げたうえで、「コンゴは当時独立していず、ウラン鉱の管理権をもつていなかったけれども、コンゴから

出たものによつて日本の両都市に多大の死傷者を生ぜしめたことについて、コンゴ国民の一人として、日本国民に深く詫びたい、また両都市の犠牲者に対して心からの同情の意を表したい」と語つたというのである。このことは、『スフィンクス』の「最後のそのあと」の節においても、節子に対してさめざめと泣くルムンバ政権下のコンゴの黒人男性が「私はいつかいちど、日本の方に出会つたら、このことを言つて広島と長崎の人々に詫びたいと思つていた」と述べる部分にも活かされている。

『スフィンクス』では「斜視（ルーシュ）作戦」と呼ばれている謎の作戦があり、節子はその真相を知りたいと思つていたが、実はそれはアルジェリア独立後にはサハラ砂漠での核実験をフランスに許さないという方針、あるいはFLN内部におけるこの運動のことを「斜視（ルーシュ）作戦」と名付けていたのであつた。アルジェリアから、そしてコンゴからまるで斜視（ルーシュ）のように被爆国である日本が凝視されていたというわけである。焦点となつていたのは、フランスの停戦協定成立の条件の一つにサハラ砂漠での核実験場を確保し実験を継続することがあげられていたことである。アルジェリア独立を願うFLNの運動家たちが停戦と引き換えに核実験を許すことはできないと考える根拠は、広島と長崎の死者たちであつた。『スフィンクス』では、アルジェリア独立と被爆都市の広島および長崎がつながってくるのである。

このコンゴのカタンガ鉱山から産出されたウランのことと、停戦と引き換えのサハラ砂漠における核実験存続のことは、エッセイ『盃の行方』（『中央公論』一九六三年一月号）でも詳しく説明されている。ただし、堀田の文章では「コンゴのカタンガ州の鉱山」とあるのみで、シンコロブウェ鉱山の名称は出てこない。けれども、当時ベルギーの

植民地であったコンゴのカタンガ州から産出されたウラン鉱石によって製造された原爆が広島と長崎に落とされたことを繰り返して書く堀田の核に対する認識は、すでに第一節で述べた植民地問題と並んで『スフィンクス』の大きなテーマである。原爆を投下したアメリカ人パイロットを描いた『審判』を持ち出すまでもなく、高橋誠一郎氏が論じるように核問題は堀田文学において重要な位置を占めていた。^①このコンゴ青年との出会いが『スフィンクス』連載の前年、一九六二年初頭のカイロにおけるA A作家会議カイロ大会においてであったことに留意したい。A A作家会議は堀田の文学的テーマが胚胎する重要な契機であったのである。

もう一人、このA A作家会議カイロ大会で出会った重要人物として、モハメド・ケメステイをあげておかねばならない。『スフィンクス』「信号は赤」の節において、節子はドイツのボンでアーセンの運転する車に同乗し、敵方によって故意に起こされた事故に巻き込まれて重傷を負う。一方、アーセンは意識不明の重傷となり結局は入院先で死亡してしまうのだ。この事故死した（というか暗殺された）ムスタファ・アーセンには、暗殺されたモハメド・ケメステイの影が投影されていると考えられる。ケメステイについては、竹森敬子「堀田善衛とケメステイ」が、ケメステイに関する堀田文章一覧やケメステイ自身の年譜的事項を明らかにして大変有益であるが、堀田がいかにこの青年を印象深く思っていたかは「盃の行方」以外にも「我慢について」（『展望』一九六五年一月号）や「人、親しければ」（『ちくま』一九八〇年七月号から八一年三月号連載）、『めぐりあいし人々』（集英社、一九九三年）に繰り返して書かれていることから理解できる。

モハメド・ケメステイは、堀田によれば「アルジェリア全学連の親

分といったところの、ケメステイという名の若い人」というふうには、若々しい生き生きとした様子で表現されている。竹森論文によれば、ケメステイは一九三〇年にアルジェリアで生まれ、フランスで大学教育を受けつつFLNの活動に従事。エヴィアン協定により一九六二年にアルジェリア独立戦争の停戦が成立し、アルジェリア民主人民共和国が独立しベン・ベラ大統領が就任したあとは、初代外務大臣に任命された。しかし、翌年一九六三年四月に銃撃を受けて五月に死去。ベン・ベラ大統領は「ケメステイが死んでも革命は続く」と述べ、その争議にはエジプトのナセル大統領を含む多くの外国人代表団出席のもとにおこなわれたという。

堀田はケメステイ死去が伝えられたさい、追悼文を書いている。全集には収録されていないが、実はA A作家会議日本協議会が発行していた『アジア・アフリカ通信』第十三号（一九六三年四月）に無記名で書かれている「アルジェリア外相の死を悼む」は、堀田執筆のものであり、本文は次の通り堀田でなければ書けない文である。^③

アルジェリアの外務大臣モハメド・ケミスチ氏は、暴漢におそわれたことが原因となり五月五日遂に逝去されました。同氏はアルジェリア独立のために青春をなげうって闘争をつづけ、昨年七月ベンベラ内閣成立とともに外相となり、そのすぐれた才智と情熱をもって、新しい国の発展につくされていたのですが、全く惜しんでも惜しみつくせない不慮の最期でありました。日本協議会は昨年二月のカイロA A大会において親しく同氏と話しあった思い出をあらたに謹んでかぎりない哀悼の意を表します。（『アジア・アフリカ通信』第十三号、一八頁）

一九六三年五月、『スフィンクス』連載が始まった直後のケメステイの死は、堀田にとっても衝撃であっただろう。『スフィンクス』一番の山場であるレマン湖でのモーターボートのピクニックでは、節子を囲んでFLNメンバーがこれまでのいきさつを説明し節子に詫げる場面がある。カイロでベン・アシュラフから手紙を託された節子がボンで重大事故に遭ったことの背景、すなわちフランスとの停戦協定の条件をはじめとしたFLNの方針が明らかにされるのだが、手紙を託したベン・アシュラフや事故死した（暗殺された）ムスタファ・アーセンには、ケメステイが投影されているだろう。『めぐりあいし人々』によれば、実際に手紙を託されたのは堀田自身で、それもケメステイから託されたのだった。『スフィンクス』の二人の主人公、節子と奥田は堀田自身の分身であるが、ケメステイの像は作中のさまざまな人物が分け持っている。

このように『スフィンクス』では、一九六二年初頭のAA作家会議カイロ大会で出会ったコンゴの青年やアルジェリアのケメステイがモデルとして重要な役割を果たしている。

三 「文学がない」という批判

——雑誌『アジア・アフリカ通信』とAA作家会議東京大会

さて、堀田によるケメステイ追悼文が掲載された『アジア・アフリカ通信』は、AA作家会議日本協議会が発行していた機関誌で、一九六一年十月発行の第一号から一九六四年十月発行の第二〇号まで、合併号もあるため全一八冊が確認されている⁽⁴⁾。この機関誌は、AA作家会議の日本側の組織であったAA作家会議日本協議会（委員長は石川達三、事務長は堀田善衛）が主体となつて一九六一年三月に開催したAA作家

会議東京大会のあと、その大会の成果や反省を踏まえて第一号が刊行された。発行人は堀田善衛である。同誌編集後記によれば、さきに一節で『スフィンクス』評を確認した開高健や、ほかにも大江健三郎が編集に関与していた。一五、六頁ほどの薄い冊子であるが、当時の日本作家と海外作家との交流の様子や問題点がうかがえる重要な雑誌である。たとえば、堀田はAA作家会議東京大会への反省点として次のように語っている。

ほんの少数の人たちを除いては、私たちはみなまったくの素人だということを認めなければならぬでしょう。アジアについても、アフリカについても、私たちはいったい何を知っている、何をいったい期待しているのか。（略）インド史専門家の荒松雄さんが次のように申されます。

「美しいスローガンや激越な呼びかけが、人びとを共感に導く一方で、一種の不感症的な慢性症状を起こさせている事実もこの際考える必要がある。一部のアジア・アフリカ論は、読まないでも分っていると言えいわれている。そういう傾向が、アジア軽視の傾向を、論者の意図とはまるで逆に、助長している事実が残念ながら指摘せざるをえない。」

そういうこともあると思います。（略）なんにしても、すべて今日明日で勝負のきまることではないので、遠慮深く、かつ大胆に進まねばならぬでしょう。（『アジア・アフリカ通信』第二号、一頁）

この「遠慮深くかつ大胆に」は『アジア・アフリカ通信』第二号の巻頭に掲載された短い文で、サブタイトルには「東京大会の反省と今後の課題」を特集するにあたって」とある。第二号は東京大会を振り

返った特集であり、東京大会については第三号掲載の尾崎秀樹「遅すぎた発言」が東京大会と戦時下の大東亜文学者大会を並べて批判した重要な問題提起だった⁵⁾。

尾崎の問題提起も見逃せない重要なものだったが、それとは別に、当時、東京大会あるいはA A作家会議は政治的でありすぎるという批判が強かった。右の堀田の文章はその批判を踏まえたものである。堀田はここで、荒松雄が述べること——A A作家会議といえば、読まなくても分かる。反帝国主義や反植民地主義のスローガンに過ぎない——について同感の意を表明しながら、今日明日で決まることではないので「遠慮深く、かつ大胆に進まねばならぬ」と述べている。東京大会が政治的だったという批判を受けて、自分たちは全くの素人で何も知らないためまずはアジアやアフリカについて知ることが大事だということ、反帝国主義や反植民地主義のスローガンやプロパガンダを克服する必要があること、そして「遠慮深く、かつ大胆に進まねばならぬ」と述べていることに留意したい。未来を見据えたこの構えの大きさが、前節でみたケメステイやコンゴの青年との交流など、堀田の三〇年にわたるA A作家会議への関与を可能にしたのであろう。

このような『アジア・アフリカ通信』第一号には、巻末に「会員短信」という会員からの投稿欄があった。複数の短信が掲載されているなかに『赤毛のアン』翻訳で知られる児童文学者村岡花子による「大会には半日だけ出てみました。各代表の演説を聞きましたが、何れも構想はひどく立派ですが文学そのものに対する直截な考えがうかがわれませんでした。つまり文学以前と申しましょうか、そうした感想のラ列であつたことに、予想はしたものの失望しました」との短信が掲載されていた。

村岡花子がA A作家会議東京大会に参加したこと自体が意外であつ

たが、ここでは東京大会への失望が書かれていて、その中心は「文学がない」という批判であつた。これは、先の堀田が引用した荒松雄が述べたという発言にも通じるであろう。政治的スローガンのみが繰り返されて「文学がない」ことへの失望は、東京大会開催主体であつたA A作家会議日本協議会にもひどく応えたものではなかったか。東京大会のみならずA A作家会議自体が政治的であるという批判があり、それを受けての堀田の「遠慮深く、かつ大胆に」という提言であつたが、ほかにも阿部知二「政治について」(第五号)はA A作家会議は「平和や平等や民族の独立などの善い政治のための集り」であり「文学者だからといって善い政治への志向を封じられるいわれはない」と述べ、大江健三郎「はたして政治的だったか」(『新日本文学』一九六一年六月号、大会記録集『アジア・アフリカ作家会議東京大会』一九六一年九月刊行に再録)は、この国際会議に日本政府が協力せず米国追従であつたことを問題視していた。政治的という批判がありはするがはたして本当に政治的であつたかどうか疑問だという評価である。A A作家会議に協力的な文学者と、村岡花子のように対立的な文学者とで、東京大会に対する印象は大きく異なっていたようだ。

四 なぜ『スフィンクス』は書かれたか

——「死」から「生」へ歴史のメタファーとして

前節では、『スフィンクス』連載直前のA A作家会議東京大会批判を概観したが、『スフィンクス』に戻ろう。「ブルースト野郎とあわれなヴェトナム人」の節には、奥田の述懐として「日本の若者たちの一部には、どうやら一種の、アジア・アフリカ熱とでもいいたいものがあるらしかった」とある。奥田は日本とアフリカとの貿易にしても、実

際は米国やフランスが利益を得る仕組みになっていることを知っている。植民地主義や帝国主義が一扫されることなど夢のまた夢だと考えている奥田は「遠く遙かな繁栄する日本にのうのうと暮らしていながら、なにが『アジア・アフリカ』だ」「それはかつての大東亜共栄圏を裏返しただけのものではないか」とさえ思っているのである。

若者たちのアジア・アフリカ熱というのは、作中の節子がFLNの活動に首を突っ込む向こう見ずな行動に現れていて、日本における「アジア・アフリカ熱」を念頭において堀田は節子を造形しているのである。しかしそれは、一九五六年にニューデリーでのアジア作家会議に出席してからA A作家会議の問題に取り組んできた堀田が自分自身を突き放して見ている視線による認識でもあった。あるいは、大東亜共栄圏を裏返しただけのものという見解は、先に触れた『アジア・アフリカ通信』第三号掲載の尾崎秀樹「遅すぎた発言」からの影響があったのかもしれない。堀田はA A作家運動に熱心に取り組みながらも、『スフィンクス』の叙述からすればこのように客観的に見ていたことは留意したい。

そして「黒い巨樹」の節には、堀田がかつて『歴史』（新潮社、一九五三年）や『上海にて』（筑摩書房、一九五九年）で描いたような対敵貿易を想起させる挿話も描かれていた。日中戦争時、奥田が中国大陸で敵である重慶軍と話をつけて福建省のタングステン鉱を日本軍のために買い付けに行ったことを思い出し「戦争の舞台裏では何が行われているか知れたものではなかった」と考える場面である。

歴史はそういう陰々たるものの運動——それを小便臭い日常道徳や、国や社会の建前などから見て、もし「悪」だというならば「悪」でもいい——によって、それを通じて、ほんの少しその歯車

が動く、あるいは滑らぬように歯止めをかけられるのだ、という固定観念が奥田の内部で、育っていた。それは、彼の胸底の、暗黒のなかで、重く深く根をおろしていた。（新版全集第六巻二九二—二九三頁）

この奥田の認識は、堀田自身の認識であると考えて差し支えあるまい。だからこそ『歴史』や『上海にて』が、そして『スフィンクス』も書かれたのである。そして、この「黒い巨樹」に類する表現として『スフィンクス』での砂漠の表象に注目するならば、作品冒頭では、砂漠は「生を否定する無限の死の砂のひろがり」と言われていた。節子は留学中に地理学研究所で砂漠の研究に従事しその後ユネスコに就職したが、砂漠をそれほど好んではない。一方、奥田は砂漠にとりつかれた人間である。「幻の鉄路」の節で奥田は、日本は高度に発達した文明を持つ国の中でも、砂漠をまったく知らない唯一の民族であり、その一方でキリスト教もイスラム教も一切の生物を拒否する砂漠に育った厳格な思想であると考えている。突き詰めて考えることのない日本の甘やかされた思想と、しかしながらそれゆえの豊かさを思う。

砂漠が「死」であることは、作中でも何度か触れられているが、堀田『めぐりあいし人びと』においても、かつて堀田がA A作家会議カイロ大会でカイロに行ったときに、ピラミッドやスフィンクスを見たが気持ちのいいものではなく、同行した武田泰淳も「死の砂だ」と言っていたと回想されていた。砂漠についてのこのような堀田の認識をもとにして、『スフィンクス』でも暗黒的な「生を否定する無限の死」と表象されていることに留意したい。それを踏まえたうえで『スフィンクス』最終節「死と生と」の直前に、ムスタファ・アーセンの死を知った節子はこのように考えている。

砂漠の紫色に熟した太陽の下にピラミッドやヌービアの巨大な遺跡群もまた、それを築いたり彫り下げたりするについて数千の、あるいは数万の犠牲を出しているであろうが、人々の方は一切消え果てて、遺跡だけが、むき出しの謎のように、砂とナイル河畔に残っている。

「どういうんだろうな……?」

とつぶやいてみて、そのもう一つ奥に、いちばん大きな謎がぼつかりと口をひらいているように思われる。が、スフィックスの謎のように、たとえその謎が解明されたとしても、それがどうだというのだ。人の世界のあわれさには、なんの変りもないであろうと思う。(新版全集第六卷三九四頁)

多くの人間の犠牲のうえに成り立ったピラミッドなどの遺跡について、節子は「人の世界のあわれさ」に変わりはないと考えている。この感慨は堀田が『スフィックス』あとがきで述べた「戦争という、多くの人々の生死を賭けた、もつとも徹底した政治の行われ方、そういう政治の裏と表、たとえそれが植民地解放という正義の名におけるものであったとしても、それがともなっている光輪の二重三重は、人を焼き殺すだけの熱度をたしかにもっている、しばしばそれは人を眩るめく思いをさせる。」という部分にも通じるであろう。人間がいかにしても太刀打ちできない大きなものの、「黒い巨樹」で言われていた「陰々たるものの運動」によって動く歴史、スパイのヴェトナム人やFLNのムスタファ・アーセンのような多くの犠牲のもとで行われる冷酷な政治、しかし正義の名における政治は残酷であると分かっている人も人を魅了することなど、堀田の認識は深い。

堀田善衛『スフィックス』はなぜ書かれたか

このような認識のもとで書かれた『スフィックス』は、AA作家会議カイロ大会での経験をもとにして、継続する植民地主義や核問題を基調としながら、最終的には解放運動に連帯する主人公たちの恋愛へと至ったのであった。作品最終部にいたって節子と奥田が結ばれるという展開は、想定外であり通俗的で陳腐ともいえる。意外なことに『スフィックス』は、アルジェリア独立という革命運動や政治問題を描きながらメロドラマ的展開で恋愛へと収束するのである。この展開を考慮すれば、『スフィックス』が書かれた理由のひとつには前節で確認したAA作家会議には「文学がない」という批判への応答だと考えられはしないか。この場合の「文学」は通俗性やメロドラマ的展開を含意するが、恋愛に落ち着くメロドラマ的展開に限らずとも『スフィックス』は国際政治の裏側を描いた小説として『エコノミスト』の読者を魅了したに違いない。恋愛へと至るメロドラマ的展開や国際政治でスパイが暗躍するハードボイルド的作品は、ややもすれば大衆におもねる通俗なものとして「文学」を矮小化する可能性もある。ただし、堀田はその可能性も了解しながら、植民地問題や核問題をテーマに捉えつつもメロドラマ的文学作品が可能であることを提示したのではない。メロドラマ的展開については『時間』を執筆する際にも意識されていたよう⁶⁾だ。

タイトルの『スフィックス』とは、多くの犠牲のうえに成り立った遺跡スフィックスがいまも残っていることから、核戦争で人類が滅亡しても依然として残る歴史のメタファーであろう。「黒い巨樹」で言われていたような歴史である。スフィックスの聳え立つ砂漠は「死」の表象であった。その一方で、最終的に結婚してこれからの人生をともにする節子と奥田を描いたことは、堀田が本作においても「生」への希求を選択したということである。最終節「死と生」という見出しの

ように、堀田は『スフィンクス』の三年後に書くことになる『若き日の詩人たちの肖像』（新潮社、一九六八年）においても、死ぬことが美化され戦死が慫慂される時代に抗って「生」への志向を貫く若者を描いた。『若き日の詩人たちの肖像』のみならず南京虐殺を描いた『時間』（新潮社、一九五五年）も同様である。「死」と「生」は常に隣り合っていて「死」を克服して「生」を希求するのが堀田文学の基軸であることを『スフィンクス』でも確認できた。

終わりに

以上のように『スフィンクス』はA A作家会議東京大会における「文学がない」という批判への応答として書かれた作品であり、継続する植民地主義をはじめとしたA A作家運動から導かれたテーマが盛り込まれている。その一方で、アルジェリア独立戦争の支援などアジア・アフリカの第三世界との連帯を目指していたA A作家会議の運動は、しかしながら「きれいな事」ではすまない面があることも『スフィンクス』では語られている。さらに、人類が消滅する可能性としての核戦争は「巨大なニヒリズム」（全集第六巻解説）を誘発し、それと文学はいかにして戦い克服できるかという問題意識も堀田にはあった。「死」から「生」へと移行する契機を諦めないためには「黒い巨樹」としての歴史、人間の犠牲のもとで残る「スフィンクス」のような歴史を見据えながら進めていくしかないのだろう。『スフィンクス』に見られる歴史への視線は堀田文学の基底をなしている。

注

- (1) 高橋誠一郎『堀田善衛とドストエフスキー』（群像社、二〇二一年）が堀田善衛と核問題について詳細に論じている。
- (2) 竹森敬子「堀田善衛とケメステイ」（『海龍』第十五号、二〇一九年、堀田善衛の会）。ほかにケメステイについては鶴戸聡「『スフィンクス』論」（堀田善衛研究論集 世界を見据えた文学と思想）（桂書房、二〇一四年）所収）参照。
- (3) 二〇〇八年に神奈川近代文学館で開催された『堀田善衛展』の図録に掲載されている堀田年表には堀田の文として記載されている。
- (4) 拙論「アジア・アフリカ作家会議日本協議会と『アジア・アフリカ通信』（『図書の譜』第二八号、二〇二四年三月、明治大学図書館）において『アジア・アフリカ通信』総目次を掲載した。
- (5) 拙論「アジア・アフリカ作家会議東京大会と大東亜文学者大会——尾崎秀樹の問題提起をめぐって」（『明治大学日本文学』第四九号、二〇二五年三月、明治大学日本文学研究會）を参照されたい。
- (6) 堀田善衛・佐々木基一「日本・革命・人間」（『新日本文学』一九五五年六月号）で、堀田が『時間』の設定はメロドラマ的要素が大きいかいけれどもその逆の方向へ進めたと語っているように、メロドラマ的展開にはもともと意識的であった。

付記

小稿は国際研究集会「文化冷戦と文学 特集堀田善衛」（二〇二四年十一月十七日、専修大学神田キャンパス、コーディネーター吉原ゆかり筑波大学教授）で報告した内容に基づいている。当日、有益なコメントをくださった皆様に感謝したい。

（明治大学文学部専任教授）